

紫式部日記(黒川本)

紫式部日記(黒川本)

Table of Contents

第一部 敦成親王誕生記	1
1. 第一章 寛弘五年(一〇〇八)秋の記	1
2. 第二章 寛弘五年(一〇〇八)冬の記	14
3. 第三章 寛弘六年(一〇〇九)春の記	32
第二部 宮仕女房批評記	35
1. 第一章 人物批評	35
2. 第二章 わが身と心を自省	41
第三部 宮仕生活備忘記	47
1. 第一章 寛弘五年五月二十二日、土御門殿邸の法華三十 講	47
2. 第二章 寛弘五年土御門邸にて 道長と和歌贈答	48
3. 第三章 寛弘七年正月 若宮たちの御戴餅	49

第一部 敦成親王誕生記

1. 第一章 寛弘五年(一〇〇八) 秋の記

1.1. 土御門殿邸の初秋の様子

秋のけはひ入りたつままに、土御門殿のありさま、いはむかたなくをかし。池のわたりの梢ども、遣水のほとりの草むら、おのがじし色づきわたりつつ、大方の空も艶なるにもてはやされて、不断の御読経の声々、あはれまさりけり。やうやう涼しき風のけはひに、例の絶えせぬ水の音なび、夜もすがら聞きまがはさる。

御前にも、近うさぶらふ人びとはかなき物語するをきこしめしつつ、悩ましうおはしますべかめるを、さりげなくもて隠させたまへる御ありさまなどの、いとさらなる事なれど、憂き世の慰めには、かかる御前をこそ、尋ね参るべかりけれと、現し心をばひき違へ、たとしへなくよろづ忘らるるも、かつはあやし。

1.2. 五壇の御修法

まだ夜深きほどの月さし曇り、木の下をぐらきに、
「御格子参りなばや。」 「女官は、今までさぶらはじ。」 「藏人参れ。」

など言ひしろふほどに、後夜の鉦打ち驚かして、五壇の御修法の時始めつ。われもわれもと、うち上げたる伴僧の声々、遠く近く、聞きわたされたるほど、おどろおどろしく尊し。

観音院の僧正、東の対より、二十人の伴僧を率ゐて、御加持参りたまふ足音、渡殿の橋のとどろとどろと踏み鳴らさるるさへぞ、ことごとのけはひには似ぬ。法住寺の座主は馬場の御殿、浄土寺の僧都は文殿などに、うち連れてたる浄衣姿にて、ゆゑゆゑしき唐橋どもを渡りつつ、木の間をわけ

道長との女郎
花の歌の贈答

て帰り入るほども、遙かに見やらるる心地してあはれなり。斎祇阿闍梨も、大威徳を敬ひて、腰をかがめたり。人びと参りつれば、夜も明けぬ。

1.3. 道長との女郎花の歌の贈答

渡殿の戸口の局に見出だせば、ほのうち霧りたる朝の露もまだ落ちぬに、殿歩かせたまひて、御隨身召して、遣水払はせたまふ。橋の南なる女郎花のいみじう盛りなるを、一枝折らせたまひて、几帳の上よりさし覗かせたまへる御さまの、いと恥づかしげなるに、我が朝顔の思ひ知らるれば、

「これ、遅くては悪ろからむ。」

とのたまはするにことつけて、硯のもとに寄りぬ。

女郎花盛りの色を見るからに 露の分きける身こそ知らるれ
(一)

「あな、疾。」

と、ほほ笑みて、硯召し出づ。

白露は分きても置かじ女郎花 心からにや色の染むらむ(二)

1.4. 殿の子息三位の君頼通の姿

しめやかなる夕暮に、宰相の君と二人、物語してゐたるに、殿の三位の君、簾のつま引き上げてみたまふ。年のほどよりはいと大人しく、心にくきさまして、

「人はなほ心ばへこそ、難きものなめれ。」

など、世の物語、しめじめとしておはするけはひ、幼しと人のあなづりきこゆるこそ悪しけれと、恥づかしげに見ゆ。うちとけぬほどにて、

「多かる野辺に」

とうち誦じて、立ちたまひにしさまこそ、物語にほめたる男の心地しはべりしか。

かばかりなる事の、うち思ひ出でらるるもあり、その折はをかしきことの、過ぎぬれば忘るるもあるは、いかなるぞ。

1.5. 碁の負わざ

播磨守、碁の負けわざしける日、あからさまにまかでて、後にぞ御盤のさまなど見たまへしかば、華足などゆゑゆゑしくして、洲浜のほとりの水に書き混ぜたり。

紀伊の国の白良の浜に拾ふてふ この石こそは巖ともなれ
(三)

扇どもも、をかしきを、そのころは人びと持たり。

1.6. 八月二十日過ぎの宿直の様子

八月二十余日のほどよりは、上達部、殿上人ども、さるべきはみな宿直がちにて、橋の上、対の簀子などに、みなうたた寝をしつつ、はかなう遊び明かす。琴、笛の音などには、たどたどしき若人たちの、読経あらそひ、今様歌どもも、所につけてはをかしかりけり。

宮の大夫<齊信>、左の宰相中将<経房>、兵衛の督、美濃の少将<济政>などして、遊びたまふ夜もあり。わざとの御遊びは、殿おぼすやうやあらむ、せさせたまはず。

年ごろ里居したる人びとの、中絶えを思ひ起こしつつ、参り集ふけはひ騒がしうて、そのころはしめやかなることなし。

1.7. 八月二十六日、弁宰相の君の昼寝姿

二十六日、御薫物合せ果てて、人びとにも配らせたまふ。まろがしみたる人びと、あまた集ひみたり。

上より下るる道に、弁の宰相の君の戸口をさし覗きたれば、昼寝したまへるほどなりけり。萩、紫苑、色々の衣に、濃きが打ち目、心ことなるを上に着て、顔は引き入れて、硯の筥に枕して臥したまへる額つき、いとらうたげになまめかし。絵に描きたるものの姫君の心地すれば、口おほひを引きやりて、

「物語の女の心地もしたまへるかな。」

九月九日、菊の綿の歌

といふに、見上げて、

「もの狂ほしの御さまや。寝たる人を心なく驚かすものか。」

とて、すこし起き上がりたまへる顔の、うち赤みたまへるなど、こまかにをかしようこそはべりしか。

大方もよき人の、折からに、又こよくなくまさるわざなりけり。

1.8. 九月九日、菊の綿の歌

九日、菊の綿を兵部のおもとの持て来て、

「これ、殿の上の、とり分きて。『いとよう、老い拭ひ捨てたまへ』と、のたまはせつる。」

とあれば、

菊の露若ゆばかりに袖触れて

花のあるじに千代は譲らむ

(四)

とて、返したてまつらむとするほどに、「あなたに帰り渡らせたまひぬ」とあれば、用なさにとどめつ。

1.9. 九月九日の夜、御前にて

その夜さり、御前に参りたれば、月をかしきほどにて、端に、御簾の下より裳の裾など、ほころび出づるほどほどに、小少将の君、大納言の君などさぶらひたまふ。御火取りに、ひと日の薫物取う出て、試みさせたまふ。御前のありさまのをかしき、薦の色の心もとなきなど、口々聞こえさするに、例よりも悩ましき御けしきにおはしませば、御加持どもも参るかたなり、騒がしき心地して入りぬ。

人の呼べば局に下りて、しばしと思ひしかど寝にけり。夜中ばかりより騒ぎたちてののしる。

1.10. 九月十日、産室に移る

十日の、まだほのぼのとするに、御しつらひ変はる。白き御帳に移らせたまふ。殿よりはじめたてまつりて、君達、四位五位どもたち騒ぎて、御帳の帷子かけ、御座ども持てちがふほど、いと騒がし。

九月十一日の暁、 加持祈祷の様子

日一日、いと心もとなげに起き臥し暮らさせたまひつ。御もののけども
駆り移し、限りなく騒ぎののしる。月ごろ、そこらさぶらひつる殿のうちの僧
をば、さらにもいはず、山々寺々を尋ねて、験者といふかぎりは残るなく参
り集ひ、三世の仏もいかに翔りたまふらむと思ひやらる。陰陽師とて、世に
あるかぎり召し集めて、八百万の神も、耳ふりたてぬはあらじと見えこ
ゆ。御誦經の使、立ち騒ぎ暮らし、その夜も明けぬ。

御帳の東面は、内裏の女房参り集ひてさぶらふ。西には、御もののけ移
りたる人びと、御屏風一よろひを引きつぼね、局口には几帳を立てつつ、
験者あづかりあづかりののしりゐたり。南には、やむごとなき僧正、僧都、
重りゐて、不動尊の生きたまへるかたちをも呼び出で現はしつべう、頼み
み恨みみ、声みな洶れわたりにたる、いといみじう聞こゆ。

北の御障子と御帳とのさま、いと狭きほどに、四十余人ぞ、後に数ふ
ればゐたりける。いささかみじろぎもせられず、気あがりてものぞおぼえぬ
や。今、里より参る人びとは、なかなかゐるこめられず。裳の裾、衣の袖、ゆく
らむかたも知らず、さるべきおとななどは、忍びて泣きまどふ。

1.11. 九月十一日の暁、加持祈祷の様子

十一日の暁に、北の御障子、二間はなちて、廂に移らせたまふ。御簾な
どもえかけあへねば、御几帳をおし重ねておはします。僧正、定澄僧都、法
務僧都などさぶらひて加持まゐる。院源僧都、昨日書かせたまひし御願
書に、いみじきことども書き加へて、読み上げ続けたる言の葉のあはれに
尊く、頼もしげなること限りなきに、殿のうち添へて、仏念じきこえたまふほ
どの頼もしく、さりともとは思ひながら、いみじう悲しきに、みな人涙をえお
し入れず、

「ゆゆしう、かうな。」

など、かたみに言ひながらぞ、えせきあへざりける。

人げ多く混みては、いとど御心地も苦しうおはしますらむとて、南、東面
に出ださせたまうて、さるべきかぎり、この二間のもとにはさぶらふ。殿の
上、讃岐の宰相の君、内蔵の命婦、御几帳の内に、仁和寺の僧都の君、

無事出産

三井寺の内供の君も召し入れたり。殿のよろづにののしらせたまふ御声に、僧も消たれて音せぬやうなり。

いま一間にゐたる人びと、大納言の君、小少将の君、宮の内侍、弁の内侍、中務の君、大輔の命婦、大式部のおもと、殿の宣旨よ。いと年経たる人びとのかぎりにて、心を惑はしたるけしきどもの、いとことわりなるに、まだ見たてまつりなるほどなけれど、類なくいみじと、心一つにおぼゆ。

また、この後ろの際に立てたる几帳の外に、尚侍の中務の乳母、姫君の少納言の乳母、いと姫君の小式部の乳母などおし入り来て、御帳二つが後ろの細道を、え人も通らず。行きちがひみじろく人びとは、その顔なども見分かれず。

殿の君達、宰相中将<兼隆>、四位の少将<雅通>などをばさらにもいはず、左宰相中将<経房>、宮の大夫など、例はけ遠き人びとさへ、御几帳の上よりともすれば覗きつつ、腫れたる目どもを見ゆるも、よろづの恥忘れたり。頂きにはうちまきを雪のやうに降りかかり、おししぼみたる衣のいかに見苦しかりけむと、後にぞをかしき。

1.12. 無事出産

御頂きの御髪下ろしたてまつり、御忌む事受けさせたまつりたまふほど、くれ惑ひたる心地に、こはいかなることと、あさましう悲しきに、平らかにせさせたまひて、後のことまだしきほど、さばかり広き母屋、南の廂、高欄のほどまで立ちこみたる僧も俗も、いま一よりとよみて額をつく。

東面なる人びとは、殿上人にまじりたるやうにて、小中将の君の、左の頭中将に見合せて、あきれたりしさまを、後にぞ人ごとと言ひ出でて笑ふ。化粧などのたゆみなく、なまめかしき人にて、暁に顔づくりしたりけるを、泣き腫れ、涙にところどころ濡れそこなはれて、あさましう、その人となむ見えざりし。

宰相の君の、顔変はりしたまへるさまなどこそ、いとめづらかにはべりしか。まして、いかなりけむ。されど、その際に見し人のありさまの、かたみにおぼえざりしなむ、かしこかりし。

午後、安堵と男 御子誕生の慶び

今とせさせたまふほど、御もののけのねたみののしる声などのむくつけさよ。源の蔵人には心誉阿闍梨、兵衛の蔵人には妙尊といふ人、右近の蔵人には法住寺の律師、宮の内侍の局には千算阿闍梨を預けたれば、ものけに引き倒されて、いといとほしかりければ、念覚阿闍梨を召し加へてぞののしる。

阿闍梨の験の薄きにあらず、御もののけのいみじうこはきなりけり。宰相の君のをき人に叡効を添へたるに、夜一夜ののしり明かして、声も洶れにけり。御もののけ移れと召し出でたる人びとも、みな移らで騒がれけり。

1.13. 午後、安堵と男御子誕生の慶び

午の時に、空晴れて朝日さし出でたる心地す。平らかにおはしますうれしきの類もなきに、男にさへおはしましける慶び、いかがはなのめならむ。昨日しほれ暮らし、今朝のほど、秋霧におぼほれつる女房など、みな立ちあかれつつ休む。御前には、うちねびたる人びとの、かかる折節つきづきしきさぶらふ。

殿も上も、あなたに渡らせたまひて、月ごろ、御修法、読経にさぶらひ、昨日今日召しにて参り集ひつる僧の布施賜ひ、医師、陰陽師など、道々のしるし現れたる、禄賜はせ、内には御湯殿の儀式など、かねてまうけさせたまふべし。

人の局々には、大きやかなる袋、包ども持てちがひ、唐衣の縫物、裳、ひき結び、螺鈿縫物、けしからぬまでして、ひき隠し、「扇を持て来ぬかな」など、言ひ交しつつ化粧じつくるふ。

1.14. 外祖父道長の満足げな様子

例の、渡殿より見やれば、妻戸の前に、宮の大夫、春宮の大夫など、さらぬ上達部もあまたさぶらひたまふ。

殿、出でさせたまひて、日ごろ埋もれつる遣水つくろはせたまふ。人びとの御けしきども心地よげなり。心の内に思ふことあらむ人も、ただ今は紛

れぬべき世のけはひなるうちにも、宮の大夫、ことさらにも笑みほこりたまはねど、人よりまさるうれしさの、おのづから色に出づるぞことわりなる。右の宰相中将は権中納言とたはぶれして、対の簀子にみたまへり。

1.15. 内裏より御佩刀参る

内裏より御佩刀もて参れる頭中将頼定、今日伊勢の奉幣使、帰るほど、昇るまじければ、立ちながらぞ、平らかにおはします御ありさま奏せさせたまふ。禄なども賜ひける、そのことは見ず。

御臍の緒は殿の上。御乳付は橘の三位<徳子>。御乳母、もとよりさぶらひ、むつまじう心よいかたとて、大左衛門のおもと仕うまつる。備中守道時の朝臣のむすめ、蔵人の弁の妻。

1.16. 御湯殿の儀式

御湯殿は西の時とか。火ともして、宮のしもべ、緑の衣の上に白き当色着て御湯まゐる。その桶、据ゑたる台など、みな白きおほひしたり。尾張守知光、宮の侍の長なる仲信かきて、御簾のもとに参る。水仕二人、清子の命婦、播磨、取り次ぎてうめつつ、女房二人、大木工、右馬、汲みわたして、御瓮十六にあまれば入る。薄物の表着、かどりの裳、唐衣、釵子さして、白き元結したり。頭つき映えてをかしく見ゆ。御湯殿は、宰相の君、御迎へ湯、大納言の君<源廉子>。湯巻姿どもの、例ならずさまことにをかしげなり。

宮は、殿抱きたてまつりたまひて、御佩刀、小少将の君、虎の頭、宮の内侍とりて御先に参る。唐衣は松の実の紋、裳は海賦を織りて、大海の摺目にかたどれり。腰は薄物、唐草を縫ひたり。少将の君は、秋の草むら、蝶、鳥などを、白銀して作り輝かしたり。織物は限りありて、人の心にしくべいやうのなければ、腰ばかりを例に違へるなめり。

殿の君達二ところ、源少将<雅通>など、散米を投げののしり、われ高ううち鳴らさむと争ひ騒ぐ。浄土寺の僧都護身にさぶらひたまふ、頭にも目にも当たるべければ、扇を捧げて、若き人に笑はる。

九月十二日、 女房たちの服装

文読む博士、蔵人弁広業、高欄のもとに立ちて、『史記』の一巻を読む。弦打ち二十人、五位十人、六位十人、二列に立ちわたれり。

夜さりの御湯殿とても、様ばかりしきりてまゐる。儀式同じ。御文の博士ばかりや替はりけむ。伊勢守致時の博士とか。例の『孝経』なるべし。又奉周は、『史記』文帝の巻をぞ読むなりし。七日のほど、替はる替はる。

1.17. 九月十二日、女房たちの服装

よろづの物のくもりなく白き御前に、人の様態、色合ひなどさへ、掲焉に現れたるを見わたすに、よき墨絵に髪どもを生ほしたるやうに見ゆ。いとどものはしたなくて、輝かしき心地すれば、昼はをさをささし出でず。のどやかにて、東の対の局より参う上る人びとを見れば、色聴されたるは、織物の唐衣、同じ桂どもなれば、なかなか麗しくて、心々も見えず。聴されぬ人も、少し大人びたるは、かたはらいたかるべきこととはとて、ただえならぬ三重五重の桂に、表着は織物、無紋の唐衣すくよかにして、襲ねには綾、薄物をしたる人もあり。

扇など、みめにはおどろおどろしく輝やかさで、由なからぬさまにしたり。心ばへある本文うち書きなどして、言ひ合はせたるやうなるも、心々と思ひしかども、齢のほど同じまちは、をかしと見かはしたり。人の心の、思ひおくれぬけしきぞ、あらはに見えける。

裳、唐衣の縫物をばさることにて、袖口に置き口をし、裳の縫ひ目に白銀の糸を伏せ組みのやうにし、箔を飾りて、綾の紋にする、扇どものさまなどは、ただ、雪深き山を、月の明かきに見わたしたる心地しつつ、きらきらとそこはかと見わたされず、鏡をかけたるやうなり。

1.18. 九月十三日夜、三日の中宮職主催 の御産養

三日にならせたまふ夜は、宮司、大夫よりはじめて御産養仕うまつる。

九月十五日夜、五日
の道長主催の御産養

右衛門督<大夫齊信>は御前の事、沈の懸盤、白銀の御皿など、詳しくは見ず。

源中納言<権大夫俊賢>、藤宰相<権亮実成>は御衣、御襦袢、衣笥の折立、入帷子、包、覆、下机など、同じことの、同じ白さなれど、しぎま、人の心々見えつつし尽くしたり。近江守は、おほかたのことどもや仕うまつらむ。

東の対の西の廂は、上達部の座、北を上にて二行に、南の廂に、殿上人の座は西を上なり。白き綾の御屏風、母屋の御簾に添へて、外ざまに立てわたしたり。

1.19. 九月十五日夜、五日の道長主催の御産養

五日の夜は、殿の御産養。十五日の月曇りなくおもしろきに、池の汀近う、篝火どもを木の下に灯しつつ、屯食ども立てわたす。あやしき賤の男のさへづりありくけしきどもまで、色ふしに立ち顔なり。

主殿が立ちわたれるけはひおこたらず、昼のやうなるに、ここかしこの岩の隠れ、木のもとに、うち群れつつをる上達部の隨身などやうの者どもさへ、おのがじし語らふべかめることは、かかる世の中の光出でおはしましたることを、陰にいつしかと思ひしも、および顔にぞ、すずろにうち笑み、心地よげなるや。まいて殿のうちの人は、何ばかりの数にしもあらぬ五位どもなども、そこはかたなく腰うちかがめて行きちがひ、いそがしげなるさまして、時にあひ顔なり。

御膳まゐるとて、女房八人、一つ色にさうぞきて、髪上げ、白き元結して、白き御盤とりつづきまゐる。今宵の御まかなひは宮の内侍、いとものものしく、あぎやかなるやうだい、元結ばえしたる髪の下がりば、つねよりもあらまほしきさまして、扇にはづれたるかたはらめなど、いときよげにはべりしかな。

髪上げたる女房は、源式部<加賀守重文が女>、小左衛門<故備中守

九月十五日夜、五日
の道長主催の御産養

道時が女>、小兵衛<左京大夫明理が女とぞいひける>、大輔<伊勢齋主輔親が女>、大馬<左衛門大輔頼信が女>、小馬<左衛門佐道順が女>、小兵部<蔵人なる庶政が女>、小木工<木工允平文義といひはべるなる人の女なり>、かたちなどをかしき若人のかぎりにて、さし向かひつつゐたりたりしは、いと見るかひこそはべりしか。

例は、御膳まゐるとて、髪上ぐることをぞするを、かかる折とて、さりぬべき人びとを選らみたまへりしを、心憂し、いみじと、うれへ泣きなど、ゆゆしきまでぞ見はべりし。

御帳の東面二間ばかりに、三十余人あなみたりし人びとのけはひこそ見ものなりしか。威儀の御膳は、采女どもまゐる。戸口のかたに、御湯殿の隔ての御屏風にかさねて、また南向きに立てて、白き御厨子一よろひにまゐりすゑたり。

夜更くるままに、月のくまなきに、采女、水司、御髪上げども、殿司、掃司の女官、顔も見知らぬをり。[門+韋]司などやうの者にやあらむ、おろそかにさうぞきけさうじつつ、おどろの髪ざし、おほやけおほやけしきさまして、寝殿の東の廊、渡殿の戸口まで、ひまもなくおしこみてゐたれば、人もえ通りかよはず。

御膳まゐりはてて、女房、御簾のもとに出でゐたり。火影にきらきらと見えわたる中にも、大式部のおもとの裳、唐衣、小塩山の小松原を縫ひたるさま、いとをかし。大式部は陸奥守の妻、殿の宣旨よ。大輔の命婦は、唐衣は手も触れず、裳を白銀の泥して、いとあざやかに大海に摺りたるこそ、掲焉ならぬものから、めやすけれ。弁の内侍の、裳に白銀の洲浜、鶴を立てたるしぎま、めづらし。裳の縫物も、松が枝の齢をあらそはせたる心ばへ、かどかどし。少将のおもとの、これらには劣りなる白銀のはくさいを、人びとつきしろふ。少将のおもといふは、信濃守佐光がいもうと、殿のふる人なり。

その夜の御前のありさま、いと人に見せまほしければ、夜居の僧のさぶらふ御屏風を押し開けて、

「この世には、かういとめでたきこと、まだ見たまはじ。」

と、言ひはべりしかば、

九月十六日夜、若い女房たちの舟遊び

「あなかしこ、あなかしこ。」

と本尊をばおきて、手を押しすりてぞ喜びはべりし。

上達部、座を立ちて、御橋の上まゐりたまふ。殿をはじめたてまつりて、攤うちたまふ。上の争ひ、いとまさなし。歌どもあり。

「女房、盃。」

などある折、いかがはいふべきなど、口ぐち思ひ心みる。

めづらしき光さしそふさかづきは　もちながらこそ千代もめぐら

め(五)

「四条大納言にさし出でむほど、歌をばさるものにて、声づかひ、用意い
るべし。」

など、ささめきあらそふほどに、こと多くて、夜いたう更けぬればにや、とりわきても指さでまかでたまふ。祿ども、上達部には、女の装束に御衣、御襦袢や添ひたらむ。殿上の四位は、袷一襲ね、袴、五位は袷一襲ね、六位は袴一具ぞ見えし。

1.20. 九月十六日夜、若い女房たちの舟遊び

またの夜、月いとおもしろし。ころさへをかしきに、若き人は舟に乗りて遊ぶ。色々なる折よりも、同じさまにさうぞきたるやうだい、髪のほど、曇りなく見ゆ。

小大輔、源式部、宮城の侍従、五節の弁、右近、小兵衛、小衛門、馬、やすらひ、伊勢人など、端近くみたるを、左宰相中将<経房>、殿の中将の君<教通>、誘ひ出でたまひて、右宰相中将<兼隆>に棹ささせて、舟に乗せたまふ。片へはすべりとどまりて、さすがにうらやましくやあらむ、見出だしつつあり。いと白き庭に、月の光りあひたる、やうだいかたちもをかしきやうなる。

北の陣に車あまたありといふは、主上人どもなりけり。藤三位をはじめにて、侍従の命婦、藤少将の命婦、馬の命婦、左近の命婦、筑前の命婦、

九月十七日夜、朝
廷主催の御産養

少輔の命婦、近江の命婦などぞ聞きはべりし。詳しく見知らぬ人びとなれば、ひがごともはべらむかし。

舟の人びともまどひ入りぬ。殿出でゐたまひて、おぼすことなき御気色に、もてはやしたはぶれたまふ。贈物ども、品々にたまふ。

1.21. 九月十七日夜、朝廷主催の御産養

七日の夜は、朝廷の御産養。蔵人少将<道雅>を御使ひにて、ものの数々書きたる文、柳筥に入れて参れり。やがて返したまふ。勸学院の衆ども、歩みして参れる、見参の文また啓す。返したまふ。禄ども賜ふべし。今宵の儀式は、ことにまさりて、おどろおどろしくののしる。

御帳の内をのぞきまゐらせたれば、かく国の親ともてさわがれたまひ、うるはしき御気色にも見えさせたまはず、すこしうちなやみ、面やせて大殿籠もれる御ありさま、常よりもあえかに若くうつくしげなり。小さき灯籠を御帳の内に掛けたれば、隈もなきに、いとどしき御色あひの、そこひも知らず清らなるに、こちたき御髪は、結ひてまさらせたまふわざなりけりと思ふ。かへまきもいとさらなれば、えぞ書き続けはべらぬ。

おほかたのことどもは、一夜の同じこと。上達部の禄は、御簾の内より、女装束、宮の御衣など添へて出だす。殿上人、頭二人をはじめて、寄りつつ取る。朝廷の禄は、大袷、衾、腰差など、例の公けざまなるべし。御乳付け仕うまつりし橘三位の贈物、例の女の装束に、織物の細長添へて、白銀の衣筥、包などもやがて白きにや。また包みたる物添へてなどぞ聞きはべりし。詳しくは見はべらず。

八日、人びと、色々さうぞき替へたり。

1.22. 九月十九日夜、春宮権大夫頼通主催の御産養

九日の夜は、春宮権大夫仕うまつりたまふ。白き御厨子一よろひに、まゐり据ゑたり。儀式いとさまことに今めかし。白銀の御衣筥、海賦をうち出

第二章 寛弘五年 (一〇〇八)冬の記

でて、蓬萊など例のことなれど、今めかしうこまかにをかしきを、取りはなちては、まねび尽くすべきにもあらぬこそ悪ろけれ。

今宵は、おもて朽木形の几帳、例のさまにて、人びとは濃きうち物を上に着たり。めづらしくて、心にくくなまめいて見ゆ。透きたる唐衣どもに、つやつやとおしわたして見えたる、また人の姿もさやかにぞ見えなされける。こまのおもとといふ人の恥見はべりし夜なり。

2. 第二章 寛弘五年(一〇〇八) 冬の記

2.1. 道長、初孫を抱く

十月十余日まで御帳出でさせたまはず。西の側なる御座に夜も昼もさぶらふ。殿の、夜中にも暁にも参りたまひつつ、御乳母の懷をひきさがさせたまふに、うちとけて寝たるときなどは、何心もなくおぼほれておどろくも、いといとほしく見ゆ。心もとなき御ほどを、わが心をやりてささげうつくしみたまふも、ことわりにめでたし。

ある時は、わりなきわざしかけたてまつりたまへるを、御紐ひき解きて、御几帳の後ろにてあぶらせたまふ。

「あはれ、この宮の御尿に濡るるは、うれしきわざかな。この濡れたるあぶるこそ、思ふやうなる心地すれ。」

と、喜ばせたまふ。中務の宮<具平親王>わたりの御ことを御心に入れて、そなたの心寄せある人とおぼして、語らはせたまふも、まことに心のうちは思ひみたること多かり。

2.2. 土御門殿邸への行幸近づく

行幸近くなりぬとて、殿の内をいよいよ繕ひ磨かせたまふ。世におもしろき菊の根を尋ねつつ掘りてまゐる。色々移ろひたるも、黄なるが見どころあるも、さまざまに植ゑたてたるも、朝霧の絶え間に見わたしたるは、げに老

時雨れのころ 小
少将の君と文通

もしぞきぬべき心地するに、なぞや、まして思ふことのすこしものめなる身ならましかば、すきずきしくももてなし若やぎて、常なき世をも過ぐしてまし、めでたきことおもしろきことを見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心のひくかたのみつよくてもの憂く、思はずに嘆かしきことのまさるぞ、いと苦しき。いかで今はなほもの忘れしなむ、思ふかひもなし、罪も深かんなりなど、明けたてばうちながめて、水鳥どもの思ふことなげに遊びあへるを見る。

水鳥を水の上とやよそに見む われも浮きたる世を過ぐしつづ
(六)

かれもさこそ心をやりて遊ぶと見ゆれど、身はいと苦しかなりと、思ひよそへらる。

2.3. 時雨れのころ 小少将の君と文通

小少将の君の文おこせたまへる返り事書くに、時雨れのさとかきくらしば、使ひも急ぐ。

「また空の気色も心地さわぎてなむ。」

とて、腰折れたることや書きませたりけむ。暗うなりにたるに、たちかへり、いたう霞みたる濃染紙に、

雲間なくながむる空もかきくらし いかにしのぶる時雨れなる
らむ(七)

書きつらむこともおぼえず、

ことわりの時雨れの空は雲間あれど ながむる袖ぞ乾く間も
なき(八)

2.4. 十月十六日 土御門殿邸行幸の日

その日、新しく造られたる舟どもさし寄せて御覧ず。龍頭鷁首の生けるかたち思ひやられて、あぎやかにうるはし。行幸は辰の時と、まだ暁より人びとけさうじ心づかひす。上達部の御座は西の対なれば、こなたは例のやうに騒がしうもあらず。内侍の督の殿の御方に、なかなか人びとの装束なども、いみじうととのへたまふと聞こゆ。

暁に少将の君参りたまへり。もろともに頭けづりなどす。例の、さいふと

行幸当日の女 房たちの装束

も日たけなむと、たゆき心どもはたゆたひて、扇のいとなほなほしきを、また人にいひたる、持て来なむと待ちあたるに、鼓の音を聞きつけて急ぎ参る、さま悪しき。

御輿迎へたてまつる船楽いとおもしろし。寄するを見れば、駕輿丁のさる身のほどながら、階より昇りて、いと苦しげにうつぶし伏せる、なにのごととなる、高きまじらひも、身のほどかぎりあるに、いと安げなしかしと見る。

御帳の西面に御座をしつらひて、南の廂の東の間に御椅子を立てたる、それより一間隔てて、東に当たれる際に北南のつまに御簾を掛け隔てて、女房のあたる、南の柱もとより、簾をすこしひき上げて、内侍二人出づ。

その日の髪上げ麗しき姿、唐絵ををかしげに描きたるやうなり。左衛門の内侍、御佩刀執る。青色の無紋の唐衣、裾濃の裳、領巾、裙帯は浮線綾を櫛[糸+炎](はじだん)に染めたり。上着は菊の五重、搔練は紅、姿つきもてなし、いささかはづれて見ゆるかたはらめ、はなやかにきよげなり。

弁の内侍は璽の御筥。紅に葡萄染めの織物の袷、裳、唐衣は、先の同じこと。いとささやかにをかしげなる人の、つつましげにすこしつみたるぞ、心苦しう見えける。扇よりはじめて、好みましたりと見ゆ。領巾は棟[糸+炎](あふちだん)。夢のやうにもごよひのだつほど、よそほひ、むかし天降りけむ少女子の姿もかくやありけむとまでおぼゆ。

近衛司、いとつきづきしき姿して、御輿のことどもおこなふ、いときらきらし。藤中将、御佩刀などとりて、内侍に伝ふ。

2.5. 行幸当日の女房たちの装束

御簾の中を見わたせば、色聴されたる人びとは、例の青色、赤色の唐衣に地摺の裳、上着は、おしわたして蘇芳の織物なり。ただ馬の中将ぞ葡萄染めを着てはべりし。打物どもは、濃き薄き紅葉をこきませたるやうにて、中なる衣ども、例のくちなしの濃き薄き、紫苑色、うら青き菊を、もしい三重など、心々なり。

御前の管弦・ 舞樂の御遊

綾聴されぬは、例のおとなおとなしきは、無紋の青色、もしは蘇芳など、みな五重にて、襲ねどもはみな綾なり。大海の摺裳の、水の色はなやかに、あざあざとして、腰どもは固紋をぞ多くはしたる。桂は菊の三重五重にて、織物はせず。若き人は、菊の五重の唐衣を心々にしたり。上は白く、青きが上をば蘇芳、単衣は青きもあり。上薄蘇芳、つぎつぎ濃き蘇芳、中に白きまぜたるも、すべてしぎまをかしきのみぞ、かどかどしく見ゆる。言ひ知らずめづらしく、おどろおどろしき扇ども見ゆ。

うちとけたる折こそ、まほならぬかたちもうちまじりて見え分かれけれ、心を尽くしてつくろひけさうじ、劣らじとしたてたる、女絵のをかしきにいとよう似て、年のほどのおとなび、いと若きけぢめ、髪のスこし衰へたるけしき、まだ盛りのこちたきがわきまへばかり見わたさる。さては、扇より上の額つきぞ、あやしく人のかたちを、しなじなくも下りてももてなすところなむめる。かかる中にすぐれたりと見ゆるこそ限りなきならめ。

かねてより、主上の女房、宮にかけてさぶらふ五人は、参り集ひてさぶらふ。内侍二人、命婦二人、御まかなひの人一人。御膳まゐるとて、筑前、左京、一もとの髪上げて、内侍の出で入る隅の柱もとより出づ。これはよろしき天女なり。左京は青色に柳の無紋の唐衣、筑前は菊の五重の唐衣、裳は例の摺裳なり。御まかなひ橘三位。青色の唐衣、唐綾の黄なる菊の袷ぞ、上着なむめる。一もと上げたり。柱隠れにて、まほにも見えず。

殿、若宮抱きたてまつりたまひて、御前にみてたてまつりたまふ。主上、抱き移したてまつらせたまふほど、いささか泣かせたまふ御声、いと若し。弁宰相の君、御佩刀執りて参りたまへり。母屋の中戸より西に殿の上おはする方にぞ、若宮はおはしまさせたまふ。主上、外に出でさせたまひてぞ、宰相の君はこなたに帰りて、

「いと顕証に、はしたなき心地しつる。」

と、げに面うち赤みてみたまへる顔、こまかにをかしげなり。衣の色も、人よりけに着はやしたまへり。

2.6. 御前の管弦・舞樂の御遊

暮れゆくままだに、楽どもいとおもしろし。上達部、御前にさぶらひたまふ。

御前の管弦・
舞楽の御遊

万歳楽、太平楽、賀殿などいふ舞ども、長慶子を退出音声にあそびて、山の先の道をまふほど、遠くなりゆくまに、笛の音も、鼓の音も、松風も、木深く吹きあはせて、いとおもしろし。

いとよく払らはれたる遣水の心地ゆきたる気色して、池の水波たちさわぎ、そぞろ寒きに、主上の御衾ただ二つたてまつりたり。左京の命婦のおのが寒かめるまに、いとほしがりきこえさするを、人びとはしのびて笑ふ。筑前の命婦は、

「故院のおはしまし時、この殿の行幸は、いとたびたびありしことなり。その折、かの折。」

など、思ひ出でて言ふを、ゆゆしきこともありぬべかめれば、わづらはしとて、ことにあへしらず、几帳隔ててあるなめり。

「あはれ、いかなりけむ。」

などだに言ふ人あらば、うちこぼしつべかめり。

御前の御遊び始まりて、いとおもしろきに、若宮の御声うつくしう聞こえたまふ。右の大臣、

「万歳楽、御声にあひてなむ聞こゆる。」

と、もてはやしきこえたまふ。左衛門督など、

「万歳、千秋」

と諸声に誦じて、主人の大殿、

「あはれ、さきぎきの行幸を、などで面目ありと思ひたまへけむ。かかりけることもはべりけるものを。」

と、酔ひ泣きたまふ。さらなることなれど、御みづからもおぼし知るこそ、いとめでたけれ。

殿は、あなたに出でさせたまふ。主上は入らせたまひて、右の大臣を御前に召して、筆とりて書きたまふ。宮司、殿の家司のさるべきかぎり、加階す。頭弁して案内は奏せさせたまふめり。

新しき宮の御よろこびに、氏の上達部ひき連れて、拝したてまつりたまふ。藤原ながら門分かれたるは、列にも立ちたまはざりけり。次に、別当に

十月十七日 行幸
翌日の中宮の御前

なりたる右衛門督、大宮の大夫よ、宮の亮、加階したる侍従の宰相、次々の人、舞踏す。

宮の御方に入らせたまひて、ほどもなきに、

「夜いたう更けぬ。御輿寄す。」

と、ののしれば、出でさせたまひぬ。

2.7. 十月十七日 行幸翌日の中宮の御前

またの朝に、内裏の御使ひ、朝霧も晴れぬに参れり。うちやすみ過ぐして、見ずなりにけり。今日ぞ初めて削いたてまつらせたまふ。ことさらに行幸の後とて。

また、その日、宮の家司、別当、おもと人など、職定まりけり。かねても聞かで、ねたきこと多かり。

日ごろの御しつらひ、例ならずやつれたりしを、あらたまりて、御前のありさまいとあらまほし。年ごろ心もとなく見たてまつりたまひける御ことのうちあひて、明けたてば、殿の上も参りたまひつつ、もてかしづききこえたまふ、にほひいと心ことなり。

2.8. 宰相の君たちと月を眺める

暮れて月いとおもしろきに、宮の亮、女房にあひて、とりわきたるよろこびも啓せさせむとにやあらむ、妻戸のわたりも御湯殿のけはひに濡れ、人の音もせざりければ、この渡殿の東のつまなる宮の内侍の局に立ち寄りて、

「ここにや。」

と案内したまふ。宰相は中の間に寄りて、まだ鎖さぬ格子の上押し上げて、

「おはすや。」

などあれど、いらへもせぬに、大夫の、

「ここにや。」

十一月一日 誕
生五十日の祝儀

とのたまふにさへ、聞きしのぼむもことごとしきやうなれば、はかなきいらへなどす。いと思ふことなげなる御けしきどもなり。

「わが御いらへはせず、大夫を心ことにもてなしきこゆ。ことわりながら悪ろし。かかる所に、上下臍のけぢめ、いたうは分くものか。」

とあはめたまふ。

「今日の尊とさ」

など、声をかしようたふ。

夜更くるままに、月いと明かし。

「格子のもと取りさけよ。」

と、せめたまへど、いと下りて上達部のゐたまはむも、かかる所といひながら、かたはらいたし、若やかなる人こそ、もののほど知らぬやうにあだへたるも罪許さるれ、なにか、あざればましと思へば、放たず。

2.9. 十一月一日 誕生五十日の祝儀

御五十日は霜月の朔日の日。例の人びとのしたてて参う上り集ひたる御前のありさま、絵に描きたる物合せの所にぞ、いとう似てはべりし。

御帳の東の御座の際に、御几帳を奥の御障子より廂の柱まで隙もあらず立てきりて、南面に御前の物は参り据ゑたり。西によりて、大宮の御膳、例の沈の折敷、何くれの台なりけむかし。そなたのことは見ず。

御まかなひ宰相の君讃岐、取り次ぐ女房も、釵子、元結などしたり。若宮の御まかなひは大納言の君、東に寄りて参り据ゑたり。小さき御台、御皿ども、御箸の台、洲浜なども、雛遊びの具と見ゆ。それより東の間の廂の御簾すこし上げて、弁の内侍、中務の命婦、小中将の君など、さべいかぎりぞ、取り次ぎつつまゐる。奥にゐて、詳しうは見はべらず。

今宵、少輔の乳母、色聴さる。こしきさまうちしたり。宮抱きたてまつり、御帳の内にて、殿の上抱き移したてまつりたまひて、みぎり出でさせたまへる火影の御さま、けはひことにめでたし。赤色の唐の御衣、地摺の御裳、麗しくさうぞきたまへるも、かたじけなくもあはれにも見ゆ。大宮は葡萄染めの五重の御衣、蘇芳の御小桂たてまつれり。殿、餅はまるりたまふ。

十一月一日 誕
生五十日の祝儀

上達部の座は、例の東の対の西面なり。いま二所の大臣も参りたまへり。橋の上に参加りて、また酔ひ乱れてののしりたまふ。折櫃物、籠物どもなど、殿の御方より、まうち君たち取り続き参れる、高欄に続けて据ゑわたしたり。たちあかしの光の心もとなければ、四位少将など呼び寄せて、紙燭ささせて、人びとは見る。内裏の台盤所にも参るべきに、明日よりは御物忌みとて、今宵みな急ぎ取り払ひつ。

宮の大夫、御簾のもとに参りて、
「上達部、御前に召さむ。」

と啓したまふ。

「聞こし召しつ。」

とあれば、殿よりはじめたてまつりて、みな参りたまふ。階の東の間を上にて、東の妻戸の前までゐたまへり。女房、二重、三重づつみわたりて、御簾どもをその間にあたりてゐたまへる人びと、寄りつつ巻き上げたまふ。

大納言の君、宰相の君、小少将の君、宮の内侍とゐたまへるに、右の大い寄りて、御几帳のほころび引き断ち、乱れたまふ。

「さだ過ぎたり。」

とつきしろふも知らず、扇を取り、たはぶれごとののはしたなきも多かり。大夫、かはらけ取りて、そなたに出でたまへり。「美濃山」うたひて、御遊び、さまばかりなれど、いとおもしろし。

その次の間の東の柱もとに、右大将寄りて、衣の褻、袖口かぞへたまへるけしき、人よりことなり。酔ひのまぎれをあなづりきこえ、また誰れとかはなど思ひはべりて、はかなきことども言ふに、いみじくざれ今めく人よりも、けにいと恥づかしげにこそおはすべかめりしか。盃の順の来るを、大将はおちたまへど、例のことなしびの、「千歳万代」にて過ぎぬ。

左衛門督、

「あなかしこ、このわたりに若紫やさぶらふ。」

と、うかがひたまふ。源氏に似るべき人も見えたまはぬに、かの上はまいていかでものしたまはむと、聞きゐたり。

「三位の亮、かはらけ取れ。」

などあるに、侍従の宰相立ちて、内の大臣のおはすれば、下より出でたるを見て、大臣酔ひ泣きたまふ。権中納言、隅の間の柱もとに寄りて、兵部のおもとひこしろひ、聞きにくきはぶれ声も、殿のたまはず。

2.10. 五十日祝いの夜の酒宴

恐ろしかるべき夜の御酔ひなめりと見て、事果つるままに、宰相の君に言ひ合はせて、隠れなむとするに、東面に殿の君達、宰相中將など入りて、騒がしければ、二人御帳の後ろに隠れたるを、取り払はせたまひて、二人ながら捉へ据ゑさせたまへり。

「和歌一つ仕うまつれ。さらば許さむ。」

と、のたまはす。いとわびしく恐ろしければ聞こゆ。

いかにいかがかぞへやるべき八千歳の 　　あまり久しき君が御代をば(九)

「あはれ、仕うまつれるかな。」

と、二たびばかり誦ぜさせたまひて、いと疾うのたまはせたる、

あしたづの齡しあらば君が代の 　　千歳の数もかぞへとりてむ(一〇)

さばかり酔ひたまへる御心地にも、おぼしけることのさまなれば、いとあはれにことわりなり。げにかくもてはやしきこえたまふにこそは、よろづのかぎりもまさらせたまふめれ。千代もあくまじき御ゆくすゑの、数ならぬ心地にだに思ひ続けらる。

「宮の御前、聞こしめすや。仕うまつれり。」

と、われぼめしたまひて、

「宮の御父にてまろ悪ろからず、まろがむすめにて宮悪ろくおはしませず。母もまた幸ひありと思ひて、笑ひたまふめり。良い夫は持たりかし、と思ひたんめり。」

と、たはぶれきこえたまふも、こよなき御酔ひのまぎれなりと見ゆ。さることもなければ、騒がしき心地はしながらめでたくのみ聞きあさせたまふ。殿の上、聞きにくしとおぼすにや、渡らせたまひぬるけしきなれば、

「送りせずとて、母恨みたまはむものぞ。」

とて、急ぎて御帳の内を通らせたまふ。

「宮なめしとおぼすらむ。親のあればこそ子もかしこけれ。」

と、うちつぶやきたまふを、人びと笑ひきこゆ。

2.11. 内裏還御の準備 御冊子作り

入らせたまふべきことも近うなりぬれど、人びとはうちつぎつつ心のどかならぬに、御前には御冊子作りいとなませたまふとて、明けたてば、まづ向かひさぶらひて、色々の紙選りととのへて、物語の本ども添へつつ、所々に文書き配る。かつは綴じ集めたたむるを役にて明かし暮らす。

「なぞの子持ちか、冷たきにかかるわざはせさせたまふ。」

と、聞こえたまふものから、よき薄様ども、筆、墨など、持てまゐりたまひつつ、御硯をさへ持てまゐりたまへれば、取らせたまへるを、惜しみののしりて、

「ものの奥にて向かひさぶらひて、かかるわざし出づ。」

とさいなむ。されど、よき継ぎ、墨、筆などたまはせたり。

局に物語の本ども取りにやりて隠しおきたるを、御前にあるほどに、やらおはしまいて、あさらせたまひて、みな内侍の督の殿にたてまつりたまひてけり。よろしう書きかへたりしはみなひき失ひて、心もとなき名をぞとりはべりけむかし。

若宮は御物がたりなどせさせたまふ。内裏に心もとなくおぼしめす、ことわりなりかし。

2.12. 里下がりしての述懐

御前の池に、水鳥どもの日々に多くなり行くを見つつ、「入らせたまはぬさきに雪降らなむ。この御前のありさま、いかにをかしからむ」と思ふに、あからさまにまかでたるほど、二日ばかりありてしも雪は降るものか。見所もなきふるさとの木立ちを見るにも、ものむつかしう思ひ乱れて、年ごろつれづれにながめ明かし暮らしつつ、花鳥の色をも音をも、春秋に行き交ふ空のけしき、月の影、霜、雪を見て、その時来にけりとばかり思ひ分きつつ、いかにやいかにとばかり、行く末の心細さはやる方なきものから、はかなき物語などにつけて、うち語らふ人、同じ心なるは、あはれに書き交はし、すこしけ遠きたよりどもを尋ねてもいひけるを、ただこれをさまざまにあへしらひ、そぞろごとにつれづれをば慰めつつ、世にあるべき人数とは思はずな

がら、さしあたりて恥づかし、いみじと思ひ知る方ばかり逃れたりしを、さも残ることなく思ひ知る身の憂さかな。

試みに物語を取りて見れど、見しやうにもおぼえず、あさましく、あはれなりし人の語らひしあたりも、われをいかに面なく心浅きものと思ひおとすらむと、おしはかるに、それさへいと恥づかしくて、えおとづれやらず。心にくからむと思ひたる人は、おほぞうにては文や散らすらむなど、疑はるべかめれば、いかでかは、わが心のうち、あるさまをも深うおしはからむと、ことわりにて、いとあいなければ、仲絶ゆとなけれど、おのづからかき絶ゆるもあまた。住み定まらずなりにたりとも思ひやりつつ、おとなひ来る人も難うなどしつつ、すべてはかなきことにふれても、あらぬ世に来たる心地ぞ、ここにてしもうちまさり、ものあはれなりける。

ただ、えさらずうち語らひ、すこしも心とめて思ふ、こまやかにものを言ひかよふ、さしあたりておのづから睦び語らふ人ばかりを、すこしもなつかしく思ふぞ、ものはかなきや。

大納言の君の、夜々は御前にいと近う臥したまひつつ、物語りしたまひしけはひの恋しきも、なほ世にしたがひぬる心か。

浮き寝せし水の上のみ恋しくて　　鴨の上毛にさへぞ劣らぬ(一一)

返し、

うちはらふ友なきころの寝覚めには　　つがひし鴛鴦ぞ夜半に恋しき(一二)

書きざまなどさへいとをかしきを、まほにもおはする人かなと見る。

「雪を御覧じて、折しもまかでたることをなむ、いみじく憎ませたまふ。」と、人びとものたまへり。殿の上の御消息には、

「まろがとどめし旅なれば、ことさらに急ぎまかでて、『疾く参らむ』とありしもそらごとにて、ほど経るなめり。」

と、のたまはせられたれば、たはぶれにても、さ聞こえさせ、たまはせしことなれば、かたじけなくて参りぬ。

十一月十七
日、中宮還御

2.13. 十一月十七日、中宮還御

入らせたまふは十七日なり。戌の時など聞きつれど、やうやう夜更けぬ。みな髪上げつつゐたる人、三十余人、その顔ども見え分かず。母屋の東面、東の廂に内裏の女房も十余人、南の廂の妻戸隔ててゐたり。

御輿には宮の宣旨乗る。糸毛の御車に殿の上、少輔の乳母若宮抱きたてまつりて乗る。大納言、宰相の君、黄金造りに、次の車に小少将、宮の内侍、次に馬の中将と乗りたるを、悪ろき人と乗りたりと思ひたりしこそ、あなごとごとしと、いとどかかあるありさまむつかしう思ひはべりしか。殿司の侍従の君、弁の内侍、次に左衛門の内侍、殿の宣旨式部とまでは次第知りて、次々は例の心々にぞ乗りける。

月の隈なきに、いみじのわざやと思ひつつ足をそらなり。馬の中将の君を先に立てたれば、行方も知らずたとたどしきさまこそ、わが後ろを見る人、恥づかしくも思ひ知らるれ。

細殿の三の口に入りて臥したれば、小少将の君もおはして、なほかかるありさまの憂きことを語らひつつ、すくみたる衣ども押しやり、厚ごえたる着重ねて、火取に火をかき入れて、身も冷えにける、もののはしたなさを言ふに、侍従の宰相、左の宰相の中将、公信の中将など、次々に寄り来つとぶらふも、いとなかなかなり。今宵はなきものと思はれてやみなばやと思ふを、人に問ひ聞きたまへるなるべし。

「いと朝に参りはべらむ。今宵は耐へがたく、身もすくみてはべり。」

など、ことなしびつつ、こなたの陣のかたより出づ。おのがじし家路と急ぐも、何ばかりの里人ぞと思ひ送らる。わが身に寄せてははべらず、おほかたの世のありさま、小少将の君の、いとあてにをかしげにて、世を憂しと思ひしみてゐたまへるを見はべるなり。父君よりことはじまりて、人のほどよりは幸ひのこよなくおくれたまへるなんめりかし。

2.14. 中宮還御の翌日、道長から中宮への贈物

昨夜の御贈物、今朝ぞこまかに御覧ずる。御櫛の篋の内の具ども、言

十一月二十日丑

の日、五節の舞

姫、帳台の試み

ひ尽くし見やらむかたもなし。手筈一よろひ、かたつかたには白き色紙作りたる御冊子ども、『古今』、『後撰集』、『拾遺抄』、その部どもものは五帖に作りつつ、侍従の中納言<行成その時大弁>、延幹と、おのおの冊子一つに四巻をあてつつ書かせたまへり。表紙は羅、紐同じ唐の組、懸子の上に入れたり。下には能宣、元輔やうの、いにしへいまの歌よみどもの家々の集書きたり。延幹と近澄の君と書きたるは、さるものにて、これはただけ近うもてつかはせたまふべき、見知らぬものどもにしなさせたまへる、今めかしうさまことなり。

2.15. 十一月二十日丑の日、五節の舞姫、帳台の試み

五節は二十日に参る。侍従の宰相に舞姫の装束などつかはす。右の宰相中将の五節にかづら申されたる、つかはすついでに、筈一よろひに薫物入れて、心葉、梅の枝をして、いどみきこえたり。

にはかにいとなむ常の年よりもいどみましたる聞こえあれば、東の御前の向かひなる立蔭に、ひまもなくうちわたしつつ灯したる火の光、昼よりもはしたなげなるに、歩み入るさまども、あさましうつれなのわざやとのみ思へど、人の上とのみおぼえず。ただかう殿上人のひたおもてにさし向かひ、紙燭ささぬばかりぞかし。屏幔ひき、おひやるとすれど、おほかたのけしきは、同じごとぞ見るらむと思ひ出づるも、まづ胸ふたがる。

業遠の朝臣のかしづき、錦の唐衣、闇の夜にもものにまぎれず、めづらしう見ゆ。衣がちに、身じろきもたをやかならずぞ見ゆる。殿上人、心ことにもてかしづく。こなたに主上も渡らせたまひて御覧ず。殿もしのびて遣戸より北におはしませば、心にまかせたらざるさし。

中清のは、「丈どもひとしくととのひ、いとみやびかに心にくきけはひ、人に劣らず」と定めらる。右の宰相の中将の、あるべきかぎりはみなしたり。樋洗の二人ととのひたるさまざとびたりと、人ほほ笑むなりし。はてに、藤宰相の、思ひなしに今めかしく心ことなり。かしづき十人あり。又廂の御簾下ろして、こぼれ出でたる衣の褌ども、したり顔に思へるさまどもよりは、見どころまさりて、火影に見えわたさる。

2.16. 二十一日寅の日、五節の舞姫、御前の試み

寅の日の朝、殿上人参る。つねのことなれど、月ごろにさとびにけるにや、若人たちのめづらしと思へるけしきなり。さるは、摺れる衣も見えずかし。

その夜さり、春宮の亮召して、薫物たまふ。大きやかなる筥一つに、高う入れさせたまへり。尾張へは殿の上ぞつかはしける。その夜は御前の試みとか、上に渡らせたまひて御覧ず。若宮おはしませば、うちまきしののしる。つねに異なる心地す。

もの憂ければしばしやすらひて、ありさまにしたがひて参らむと思ひてみたるに、小兵衛、小兵部なども、炭櫃にゐて、

「いとせばければ、はかばかしうものも見えはべらず。」

など言ふほどに、殿おはしまして、

「などで、かうて過ぐしてはみたる。いざもろともに。」

と、せめたてさせたまひて、心にもあらず参う上りたり。舞姫どもの、いかに苦しからむと見ゆるに、尾張守のぞ、心地悪しがりて往ぬる、夢のやうに見ゆるものかな。こと果てて下りさせたまひぬ。

このごろの君達は、ただ五節所のをかしきことを語る。

「簾の端、帽額さへ心々にかはりて、出でみたる頭つき、もてなすけはひなどさへ、さらにかよはず、さまさまになむある。」

と、聞きにくく語る。

2.17. 二十二日卯の日、五節の舞姫、童女御覧

かからぬ年だに御覧の日の童女の心地どもは、おろかならざるものを、ましていかならむなど、心もとなくゆかしきに、歩み並びつつ出で来たるは、あいなく胸つぶれて、いとほしくこそあれ。さるは、とりわきて深う心寄すべきあたりもなしかし。われもわれもと、さばかり人の思ひてさし出でた

二十三日辰の 日、豊明節会

ることなればにや、目移りつつ、劣りまさりけざやかにも見え分かず。今めかしき人の目にこそ、ふとものけぢめも見とるべかめれ。ただかく曇りなき昼中に、扇もはかばかしくも持たせず、そこらの君達のたちまじりたるに、さてもありぬべき身のほど、心もちるといひながら、人に劣らじとあらそふ心地も、いかに臆すらむと、あいなくかたはらいたきぞ、かたくなしきや。

丹波守の童女の青い白椽の汗衫、をかしと思ひたるに、藤宰相の童女は、赤色を着せて、下仕への唐衣に青色をおしかへしたる、ねたげなり。童女のかたちも、一人はいとまほには見えず。宰相の中将は、童女いとそびやかに、髪どもをかし。馴れすぎたる一人をぞ、いかにぞや、人のいひし。みな濃き相に、表着は心々なり。汗衫は五重なる中に、尾張はただ葡萄染めを着せたり。なかなかゆゑゆゑしく心あるさまして、ものの色合ひ、つやなど、いとすぐれたり。下仕への中にいと顔すぐれたる、扇取るとて六位の蔵人ども寄るに、心と投げやりたるこそ、やさしきものから、あまり女にはあらぬかと思ゆれ。われらを、かれがやうにて出でるよとあらば、またさてもさまよひありくばかりぞかし。

かうまで立ち出でむとは思ひかけきやは。されど、目にみすみすあさましきものは、人の心なりければ、今より後のおもなさは、ただなれになれすぎ、ひたおもてにならむやすしかしと、身のありさまの夢のやうに思ひ続けられて、あるまじきことにさへ思ひかかりて、ゆゆしくおぼゆれば、目とまることも例のなかりけり。

2.18. 二十三日辰の日、豊明節会

侍従の宰相の五節局、宮の御前のただ見わたすばかりなり。立部の上より、音に聞く簾の端も見ゆ。人のもの言ふ声もほの聞こゆ。

「かの女御の御かたに、左京の馬といふ人なむ、いと馴れてまじりたる。」

と、宰相中將、昔見知りて語りたまふを、

「一夜かのかいつくろひにてゐたりし、東なりしなむ左京。」

と、源少將も見知りたりしを、ものよすがありて伝へ聞きたる人びと、

「をかしうもありけるかな。」

五節過ぎの寂寥の日々

と、言ひつつ、いざ知らず顔にはあらじ、昔心にくだちて見ならしけむ内裏わたりを、かかるさまにてやは出で立つべき。しのぶと思ふらむを、あらはさむの心にて御前に扇どもあまたさぶらふ中に、蓬葉作りたるをしも選りたる、心ばへあるべし、見知りけむやは。笥の蓋にひろげて、日蔭をまろめて、反らいたる櫛ども、白き物忌みして、つまづまを結び添へたり。

「すこしだ過ぎたまひにたるわたりにて、櫛の反りざまなむ、なほなほしき。」

と、君達のたまへば、今様のさま悪しきまでつまもあはせたる反らしざまして、黒方をおしまろがして、ふつつかにしりさき切りて、白き紙一重ねに、立文にしたり。大輔のおもとして書きつけさす。

おほかりし豊の宮人さしわきて　　しるき日蔭をあはれとぞ見し
(一三)

御前には、

「同じくは、をかしきさまにしなして、扇などもあまたこそ。」

と、のたまはずれど、

「おどろおどろしからむも、ことのさまにあはざるべし。わざとつかはすにては、忍びやかにけしきばませたまふべきにもはべらず。これはかかる私ごとにこそ。」

と、聞こえさせて、顔しるかるまじき局の人して、

「これ中納言の君の御文、女御殿より左京の君にたてまつらむ。」

と高やかにさしおきつ。ひきとどめられたらむこそ見苦しけれと思ふに、走りきたり。女の声にて、

「いづこより入りきつる。」

と問ふなりつるは、女御殿のと、疑ひなく思ふなるべし。

2.19. 五節過ぎの寂寥の日々

何ばかりの耳とどむることもなかりつる日ごろなれど、五節過ぎぬと思ふ内裏わたりのけはひ、うちつけにさうさうぎうしきを巳の日の夜の調楽は、げにをかしかりけり。若やかなる殿上人など、いかに名残つれづれならむ。高松の小君達さへ、こたみ入らせたまひし夜よりは、女房ゆるされて、間のみなく通りありきたまへば、いとどはしたなげなりや。さだ過ぎぬるを豪家にてぞ隠ろふる。五節恋しなども、ことに思ひたらず、やすらひ、小

十一月二十八日下
酉の日、臨時の祭

兵衛などや、その裳の裾、汗衫にまつはれてぞ、小鳥のやうにさへづりざれおはさうずめる。

2.20. 十一月二十八日下酉の日、臨時の祭

臨時の祭の使ひは殿の権中将の君なり。その日は御物忌みなれば、殿、御宿直せさせたまへり。上達部も舞人の君達もこもりて、夜一夜、細殿わたり、いともの騒がしきけはひしたり。

つとめて、内の大殿の御隨身、この殿の御隨身にさしとらせていける、ありし筥の蓋に白銀の冊子筥を据ゑたり。鏡おし入れて、沈の櫛、白銀の笄など、使ひの君の鬢かかせたまふべきけしきをしたり。筥の蓋に葦手に浮き出でたるは日蔭の返り事なめり。文字二つ落ちて、あやしうことの心たがひてもあるかなと見えしは、かの大臣の、宮よりと心得たまひて、かうことごとしくしなしたまへるなりけり、とぞ聞きはべりし。はかなかりしたはぶれわざを、いとほしう、ことごとしうこそ。

殿の上も、参う上りて物御覧ず。使ひの君の藤かざして、いとものものしくおとなびたまへるを、内蔵の命婦は、舞人には目も見やらず、うちまもりうちまもりぞ泣きける。

御物忌みなれば、御社より丑の時にぞ帰りまゐれば、御神楽などもさまばかりなり。兼時が去年まではいとしきづきしげなりしを、こよなく衰へたる振る舞ひぞ、見知るまじき人の上なれど、あはれに思ひよそへらるること多くはべる。

2.21. 十二月二十九日、参内、初出仕時に 思いをはせる

師走の二十九日に参る。初めて参りしも今宵のことぞかし。いみじくも夢路にまどはれしかなと思ひ出づれば、こよなくたち馴れにけるも、うとましの身のほどやとおぼゆ。

十二月三十日の
夜、追儼の儀の後

夜いたう更けにけり。御物忌みにおはしましければ、御前にも参らず、心細くてうち臥したるに、前なる人びとの、

「内裏わたりはなほいとけはひことなりけり。里にては今は寝なましものを。さもいざとき沓のしげさかな。」

と色めかしく言ひゐたるを聞く。

年暮れてわが世更け行く風の音に 心の中のすさまじきかな

(一四)

とぞ独りごたれし。

2.22. 十二月三十日の夜、追儼の儀の後

つごもりの夜、追儼はいと疾く果てぬれば、齒黒めつけなど、はかなきつくろひどもすとて、うちとけゐたるに、弁の内侍来て、物語りして臥したまへり。内匠の蔵人は長押の下にゐて、あてきが縫ふ物の、重ねひねり教へなど、つくづくとしゐたるに、御前のかたにいみじくののしる。内侍起こせど、とみにも起きず。人の泣き騒ぐ音の聞こゆるに、いとゆゆしくものもおぼえず。火かと思へど、さにはあらず。

「内匠の君、いざいざ。」

と先におし立てて、

「ともかうも、宮下におはします。まづ参りて見たてまつらむ。」

と、内侍をあららかにつきおどろかして、三人ふるふふるふ、足も空にて参りたれば、裸なる人ぞ二人ゐたる。鞞負、小兵部なりけり。かくなりけりと見るに、いよいよむくつけし。

御厨子所の人もみな出で、宮の侍も滝口も儼やらひ果てけるままに、みなまかでにけり。手をたたきののしれど、いらへする人もなし。御膳宿りの刀自を呼び出でくたるに、

「殿上に兵部丞といふ蔵人、呼べ呼べ。」

と、恥も忘れて口づから言ひたれば、たづねけれど、まかでにけり。つらきこと限りなし。

式部丞資業ぞ参りて、所々のさし油ども、ただ一人さし入れられてありく。人びとものおぼえず、向かひゐたるもあり。主上より御使ひなどあり。い

第三章 寛弘六年
(一〇〇九)春の記

みじう恐ろしうこそはべりしか。納殿にある御衣取り出でさせて、この人びとにたまふ。朔日の装束は盗らざりければ、さりげもなくあれど、裸姿は忘れず、恐ろしきものから、をかしうとも言はず。

3. 第三章 寛弘六年(一〇〇九) 春の記

3.1. 正月三日 若宮の御戴餅の儀

正月一日、言忌みもしあへず。坎日なりければ、若宮の御戴餅の事、停まりぬ。三日ぞ参う上らせたまふ。

今年の御まかなひは大納言の君。装束、朔日の日は紅、葡萄染め、唐衣は赤色、地摺の裳。二日、紅梅の織物、搔練は濃き、青色の唐衣、色摺の裳。三日は、唐綾の桜襲、唐衣は蘇芳の織物。搔練は濃きを着る日は紅は中に、紅を着る日は濃きを中になど、例のことなり。萌黄、蘇芳、山吹の濃き薄き、紅梅、薄色など、つねの色々をひとたびに六つばかりと、表着とぞ、いとさまよきほどにはべる。

宰相の君の、御佩刀取りて、殿の抱きたてまつらせたまへるに続きて、参う上りたまふ。紅の三重五重、三重五重とまぜつつ、同じ色のうちたる七重に、単衣を縫ひ重ね、重ねまぜつつ、上に同じ色の固紋の五重、袿、葡萄染めの浮紋のかたぎの紋を織りたる、縫ひざまさへかどかどし。三重襲の裳、赤色の唐衣、菱の紋を織りて、しざまもいと唐めいたり。いとをかしげに、髪などもつねよりつくろひまして、やうだい、もてなし、らうらうじくをか。丈だちよきほどに、ふくらかなる人の、顔いとこまかに、にほひをかしげなり。

大納言の君は、いとささやかに、小さしといふべきかたなる人の、白ううつくしげにつぶつぶと肥えたるが、うはべはいとそびやかに、髪、丈に三寸ばかりあまりたる裾つき、髪ざしなどぞ、すべて似るものなく、こまかにうつくしき。顔もいとらうらうじく、もてなしなど、らうたげになよびかなり。

正月三日 若
宮の御戴餅の儀

宣旨の君は、ささやけ人の、いと細やかにそびえて、髪の筋こまかにきよらにて、生ひさがりのすゑより一尺ばかり余りたまへり。いと心恥づかしげに、きはもなくあてなるさましたまへり。ものよりさし歩みて出でおはしたるも、わづらはしう心づかひせらるる心地す。あてなる人はかうこそあらめと、心ざま、ものうちのたまへるも、おぼゆ。

第二部 宮仕女房批評記

1. 第一章 人物批評

1.1. 宰相の君、小少將の君、宮の内侍、式部のおもとの批評

このついでに、人の容貌を語りきこえさせば、物言ひさがなくやはんべるべき。ただ今をや。さしあたりたる人のことは、わづらはし、いかにぞやなど、すこしもかたほなるは、言ひはべらじ。

宰相の君は、北野の三位のよ、ふくらかに、いとやうだいこまめかしう、かどかどしき容貌したる人の、うちゐたるよりも、見もてゆくにこよなくうちまさり、らうらうじて、口つきに恥づかしげさも、匂ひやかなることも添ひたり。もてなしなどいと美々しくはなやかにぞ見えたまへる。心ざまもいとめやすく、心うつくしきものから、またいと恥づかしきところ添ひたり。

小少將の君は、そこはかとなくあてになまめかしう、二月ばかりのしだり柳のさましたり。やうだいいとうつくしげにもてなし心にくく、心ばへなどもわが心とは思ひとるかたもなきやうにもものづつみをし、いと世を恥ぢらひ、あまり見苦しきまで児めいたまへり。腹ぎたなき人、悪しきまにもてなしひつくる人あらば、やがてそれに思ひ入りて、身をも失ひつべく、あえかにわりなきところついたまへるぞ、あまり後ろめたげなる。

宮の内侍ぞ、またいときよげなる人。丈だちいとよきほどなるが、ゐたるさま、姿つき、いともものしく、今めいたるやうだいにて、こまかにとりたててをかしげにも見えぬものから、いともなきよげにそびそびしく、なか高き顔して、色のあはひ白さなど、人にすぐれたり。頭つき、髪ざし、額つきなどぞ、あなものきよげと見えて、はなやかに愛敬づきたる。ただありにもてなし、心ざまなどもめやすく、つゆばかりいづかたざまにも後ろめたいかたなく、すべてさこそあらめと、人の例にしつべき人がらなり。艶がりよしめくかたはなし。

小大輔、源式部、小兵
衛、少式、宮木の侍従、
五節の弁、小馬の批評

式部のおもとはおとうとなり。いとふくらけき過ぎて肥えたる人の、色いと白くにほひて、顔ぞいとこまかによくはべる。髪もいみじくうるはしくて、長くはあらざるべし、つくろひたるわざして、宮には参る。ふとりたるやうだいの、いとをかしげにもはべりしかな。まみ、額つきなど、まことにきよげなる、うち笑みたる、愛敬も多かり。

1.2. 小大輔、源式部、小兵衛、少式、宮木の侍従、五節の弁、小馬の批評

若人の中に容貌よしと思へるは、小大輔、源式部など。大輔はささやかなる人の、やうだいいと今めかしきさまして、髪うるはしく、もとはいところたくて、丈に一尺余あまりたりけるを、落ち細りてはべり。顔もかどかどしう、あなをかしの人やとぞ見えてはべる。容貌は直すべきところなし。源式部は、丈よきほどにそびやかなるほどにて、顔こまやかに、見るまみにいとをかしく、らうたげなるけはひ、ものきよくかはらかに、人のむすめとおぼゆるさましたり。

小兵衛、少式などもいときよげにはべり。それらは、殿上人の見残す、少なかなり。誰れも、とりはづしては隠れなけれど、人ぐまをも用意するに、隠れてぞはべるかし。

宮城の侍従こそ、いとこまかにをかしげなりし人。いと小さく細く、なほ童女にてあらせまほしきさまを、心と老いつき、やつしてやみはべりにし。髪、桂にすこし余りて未をいとはなやかに削ぎてまゐりはべりしぞ、果ての度なりける。顔もいとよかりき。

五節の弁といふ人はべり。平中納言の、むすめにしてかしづくと聞きはべりし人。絵に描いたる顔して、額いたうはれたる人の、目尻いたうひきて、顔もここはやと見ゆるところなく、色白う、手つき腕つきいとをかしげに、髪は、見はじめはべりし春は、丈に一尺ばかり余りて、こちたく多かりげなりしが、あさましう分けたるやうに落ちて、裾もさすがに細らず、長さはすこし余りてはべるめり。

齋院方と中宮 方の氣風比較

小馬といふ人、髪いと長くはべりし。むかしはよき若人、今は琴柱に膠さすやうにてこそ、里居してはべるなれ。

かういひひて、心ばせぞかたうはべるかし。それもとりどりに、いと悪ろきもなし。また、すぐれてをかしう、心おもく、かどゆゑも、よしも、後ろやすさも、みな具することはかたし。さまざま、いづれをかとるべきとおぼゆるぞ、多くはべる。さもけしからずもはべることどもかな。

1.3. 齋院方と中宮方の氣風比較

齋院に、中將の君といふ人はべるなりと聞きはべる、たよりありて、人のもとに書き交はしたる文を、みそかに人の取りて見せはべりし。いとこそ艶に、われのみ世にはもののゆゑ知り、心深きたぐひはあらじ、すべて世の人は、心も肝もなきやうに思ひてはべるべかめる、見はべりしに、すずろに心やましう、おほやけ腹とか、よからぬ人のいふやうに、にくくこそ思うたまへられしか。文書きにもあれ、

「歌などのをかしからむは、わが院よりほかに、誰れか見知りたまふ人のあらむ。世にをかしき人の生ひ出でば、わが院のみこそ御覧じ知るべけれ。」

などぞはべる。

げにことわりなれど、わが方さまのことをさしも言はば、齋院より出できたる歌の、すぐれてよしと見ゆるもことにはんべらず。ただいとをかしう、よしよしうはおはすべかめる所のやうなり。さぶらふ人を比べて挑まむには、この見たまふるわたりの人に、かならずしもかれはまさらじを。

つねに入り立ちて見る人もなし。をかしき夕月夜、ゆゑある有明、花のたより、ほととぎすのたづね所に参りたれば、院はいと御心のゆゑおはして、所のさまはいと世はなれ神さびたり。またまぎるることもなし。上に参う上らせたまふ、もしは、殿なむ参りたまふ、御宿直なるなど、ものさわがしき折もまじらず。もてつけ、おのづからしか好む所となりぬれば、艶なることどもを尽くさむ中に、何の奥なき言ひすぐしを交はしはべらむ。

かういと埋れ木を折り入れたる心ばせにて、かの院にまじらひはべらば、そこにて知らぬ男に出であひ、もの言ふとも、人の奥なき名を言ひおぼすべきならずなど、心ゆるがしておのづからなまめきならひはべりなむをや。まして若き人の容貌につけて、年齢に、つつましきことなきが、おのの心に入りて懸想だち、ものをも言はむと好みだちたらむは、こよなう人に劣るもはべるまじ。

されど、内裏わたりにて明け暮れ見ならし、きしろひたまふ女御、后おはせず、その御方、かの細殿といひならぶる御あたりもなく、男も女も、挑ましきこともなきにうちとけ、宮のやうとして、色めかしきをば、いとあはあはしとおぼしめいたれば、すこしよろしからむと思ふ人は、おぼろけにて出でゐはべらず。心やすく、もの恥ぢせずとあらむかからむの名をも惜しまぬ人、はたことなる心ばせのぶるもなくやは。たださやうの人のやすきままに、立ち寄りてうち語らへば、中宮の人埋もれたり、もしは用意なしなども言ひはべるなるべし。上臈中臈のほどぞ、あまりひき入り上衆めきてのみはべるめる。さのみして、宮の御ため、ものの飾りにはあらず、見苦しとも見はべり。

これらをかき知りてはべるやうなれど、人はみなとりどりにて、こよなう劣りまきることとはべらず。そのことよければ、かのことおくれなどぞはべるめるかし。されど、若人だに重りかならむとまめだちはべるめる世に、見苦しうざればべらむも、いとかたはならむ。ただおほかたを、いとかく情けなからずもがなと見はべり。

1.4. 中宮方の氣風

さるは、宮の御心あかぬところなく、らうらうじく心にくくおはしますものを、あまりものつつみせさせたまへる御心に、何とも言ひ出でじ、言ひ出でたらむも、後ろやすく恥なき人は、世にかたいものとおぼしならひたり。げにもの折など、なかなかなることし出でたる、後れたるには劣りたるわざなりかし。ことに深き用意なき人の、所につけてわれは顔なるが、なまひがひがしきことども、ものの折に言ひ出だしたりけるを、まだいと幼きほどにおはしまして、世になうかたはなりと聞こしめし、おぼほししみにければ、ただことなる咎なくて過ぐすを、ただめやすきことにおぼしたる御けしきに、うち

兎めいたる人のむすめどもは、みないとうよかなひきこえさせたるほどに、かくならひにけるとぞ心得てはべる。

今はやうやうおとなびさせたまふままに、世のあべきさま、人の心の良きも悪しきも、過ぎたるも後れたるも、みな御覧じ知りて、この宮わたりのことを、殿上人もなにも目馴れて、ことにをかしきことなしと思ひ言ふべかめりと、みな知るしめいたり。さりとして、心にくくもありはず、とりはづせば、いとあはつけいことも出で来るものから、情けなく引き入りたる、かうしてもあらなむとおぼしのたまはずれど、そのならひ直りがたく、また今やうの君達といふもの、たふるるかたにて、あるかぎりみなまめ人なり。

齋院などやうの所にて、月をも見、花をも愛づる、ひたぶるの艶なることは、おのづからもとめ、思ひても言ふらむ。朝夕たちまじり、ゆかしげなきわたりに、ただことをも聞き寄せ、うち言ひ、もしは、をかしきことをも言ひかけられて、いらへ恥なからずすべき人なむ、世にかたくなりたるをぞ、人びとは言ひはべるめる。みづからえ見はべらぬことなれば、え知らずかし。

かならず、人の立ち寄り、はかなきいらへをせむからに、にくいことをひき出でむぞあやしき。いとようさてもありぬべきことなり。これを、人の心ありがたしとは言ふにはべるめり。などかかならずしも、面にくくひき入りたらむがかしこからむ。また、などてひたたけてさまよひさし出づべきぞ。よきほどに、折々のありさまにしたがひて、用ゐむことのいとかたきなるべし。

まづは、宮の大夫参りたまひて、啓せさせたまふべきことありける折に、いとあえかに兎めいたまふ上臈たちは、対面したまふことかたし。また会ひても、何ごとをかほかばかしくのたまふべくも見えず。言葉の足るまじきにもあらず、心の及ぶまじきにもはべらねど、つつまし、恥づかしと思ふに、ひがごともせらるるを、あいなし、すべて聞かれじと、ほのかなるけはひをも見えじ。

ほかの人は、さぞはべらぎなる。かかるまじらひなりぬれば、こよなきあて人も、みな世にしたがふなるを、ただ姫君ながらのもてなしにぞ、みなものしたまふ。下臈の出で会ふをば、大納言心よからずと思ひたもうたなれば、さるべき人びと里にまかで、局なるも、わりなき暇にさはる折々は、対面する人なくて、まかでたまふときもはべるなり。そのほかの上達部、宮の御

和泉式部、赤染衛
門、清少納言の批評

方に参り馴れ、ものをも啓せさせたまふは、おのおの、心寄せの人、おのづからとりどりにほの知りつつ、その人ない折は、すさまじげに思ひて、たち出づる人びとの、ことにふれつつ、この宮わたりのこと、「埋もれたり」など言ふべかめるも、ことわりにはべり。

齋院わたりの人も、これをおとしめ思ふなるべし。さりとして、わが方の、見所あり、ほかの人は目も見知らじ、ものをも聞きとどめじと、思ひあなづらむぞ、またわりなき。すべて、人をもどくかたはやすく、わが心を用ゐむことはかたかべいわざを、さは思はで、まづわれさかしに、人をなきになし、世をそしるほどに、心のきはのみこそ見えあらはるめれ。

いと御覧せさせまほしうはべりし文書きかな。人の隠しおきたりけるを盗みてみそかに見せて、取り返しはべりにしかば、ねたうこそ。

1.5. 和泉式部、赤染衛門、清少納言の批評

和泉式部といふ人こそ、おもしろう書き交はしける。されど和泉はけしからぬかたこそあれ、うちとけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉のほひも見えはべるめり。歌はいとをかしきこと。ものおぼえ、歌のことわりまことの歌詠みざまにこそはべらざめれ、口にまかせたることどもに、かならずをかしき一ふしの、目にとまる詠み添へはべり。それだに、人の詠みたらむ歌、難じことわりみたらむは、いでやさまで心は得じ、口にいと歌の詠まるるなめりとぞ、見えたるすぢにはべるかし。恥づかしげの歌詠みやとはおぼえはべらず。

丹波守の北の方をば、宮、殿などのわたりに、匡衡衛門とぞ言ひはべる。ことにやむごとなきほどならねど、まことにゆゑゆゑしく、歌詠みとてよろづのことにつけて詠み散らさねど、聞こえたるかぎりは、はかなき折節のことも、それこそ恥づかしき口つきにはべれ。ややもせば、腰はなれぬばかり折れかかりたる歌を詠み出で、えも言はぬよしばみごととしても、われかしこに思ひたる人、憎くもいとほしくもおぼえはべるわざなり。

清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、

第二章 わが 身と心を自省

真名書き散らしてはべるほども、よく見れば、まだいと足らぬこと多かり。かく、人に異ならむと思ひ好める人は、かならず見劣りし、行末うたてのみはべれば、艶になりぬる人は、いとすごうすずろなる折も、もののあはれにすすみ、をかしきことも見過ぐさぬほどに、おのづからさるまじくあだなるさまにもなるにはべるべし。そのあだになりぬる人の果て、いかでかはよくはべらむ。

2. 第二章 わが身と心を自省

2.1. わが心の内の披瀝

かく、かたがたにつけて、一ふしの思ひ出でらるべきことなくて過ぐしはべりぬる人の、ことに行末の頼みもなきこそ、なぐさめ思ふかただにはべらねど、心すごうもてなす身ぞとだに思ひはべらじ。その心なほ失せぬにや、もの思ひまさる秋の夜も、端に出でて眺めば、いとど、月やいにしへほめてけむと、見えたるありさまを、もよほすやうにはべるべし、世の人の忌むといひはべる咎をも、かならずわたりはべりなむと憚られて、すこし奥にひき入りてぞ、さすがに心のうちには尽きせず思ひ続けられはべる。

風の涼しき夕暮れ、聞きよからぬ独り琴をかき鳴らしては、「嘆き加はる」と聞き知る人やあらむと、ゆゆしくなどおぼえはべるこそ、をこにもあはれにもはべりけれ。さるは、あやしう黒みすすけたる曹司に箏の琴、和琴、調べながら心に入れて、「雨降る日、琴柱倒せ」なども言ひはべらぬままに塵積もりて、寄せ立てたりし厨子と柱とのほさまに首さし入れつつ、琵琶も左右に立ててはべり。

大きな厨子一よろひに、ひまもなく積みてはべるもの、一つには古歌、物語のえもいはず虫の巢になりたる、むつかしく這ひ散れば、開けて見る人もはべらず。片つ方に書どもわざと置き重ねし人もはべらずなりにし後、手触る人もことになし。それらをつれづれせめて余りぬるとき、一つ二つ引き出でて見はべるを、女房集まりて、

「御前はかくおはすれば、御幸ひは少なきなり。なでふ女か真名書は読む。昔は経読むをだに人は制しき。」

としりうごち言ふを聞きはべるにも、物忌みける人の、行末いのち長かめるよしども、見えぬ例なりと、言はまほしくはべれど、思ひくまなきやうなり、ことはたさもあり。

2.2. わが心のありよう

よろづのこと、人によりてことごとなり。誇りかにきらきらしく心地よげに見ゆる人あり。よろづつれづれなる人のまぎることなきままに、古き反古ひきさがし、行なひがちに口ひひらかし、数珠の音高きなど、いと心づきなく見ゆるわざなりと思ひたまへて、心にまかせつべきことをさへ、ただわが使ふ人の目に憚り、心につつむ。まして人の中にまじりては、言はまほしきこともはべれど、いでやと思ほえ、心得まじき人には、言ひて益なかるべし。ものもどきうちし、われはと思へる人の前にては、うるさければもの言ふことももの憂くはべり。ことにいとしも、もののかたがた得たる人はかたし。ただ、わが心の立てつるすちをとらへて、人をばなきになすなめり。

それ、心よりほかのわが面影を恥づと見れど、えさらずさし向かひまじりゐたることだにあり。しかしかさへもどかれじと、恥づかしきにはあらねど、むつかしと思ひて、ほけ痴れたる人にいとどなり果ててはべれば、

「かうは推しはからざりき。いと艶に恥づかしく、人見えにくげに、そばそばしきさまして、物語このみ、よしめき、歌がちに、人を人とも思はず、ねたげに見落とさむものとなむ、みな人びと言ひ思ひつつ憎みしを、見るには、あやしきまでおいらかに、こと人かとなむおぼゆる。」

とぞ、みな言ひはべるに、恥づかしく、人にかうおいらけものと見落とされにけるとは思ひはべれど、ただこれぞわが心と、ならひもてなしはべるありさま、宮の御前も、

「いとうちとけては見えじとなむ思ひしかど、人よりけにむつまじうなりにたるこそ。」

と、のたまはする折々はべり。くせぐせしくやさしだち、恥ぢられたてまつる人にも、そばめたてられではべらまし。

2.3. 人の心のありよう 結論

さまよう、すべて人はおいらかに、すこし心おきてのどかに、おちみぬるをもととしてこそ、ゆゑもよしも、をかしく心やすけれ。もしは、色めかしくあだあだしけれど、本性の人がら癖なく、かたはらのため見えにくきませせずだになりぬれば、憎うははべるまじ。

われはと、くすしくならひもち、けしきことごとしくなりぬる人は、立ち居につけて、われ用意せらるるほども、その人には目とどまる。目をしとどめつれば、かならずものを言ふ言葉の中にも、来てある振る舞ひ、立ちて行く後ろでにも、かならず癖は見つけらるるわざにはべり。もの言ひすこしうち合はずなりぬる人と、人の上うち落としめつる人とは、まして耳も目も立てらるるわざにこそはべるべけれ。人の癖なきかぎりには、いかではかなき言の葉をも聞こえじとつつみ、なげの情けつくらまほしうはべり。

人すすみて、憎いことし出でつるは、悪ろきことを過ちたらむも、言ひ笑はむに、憚りなうおぼえはべり。いと心よからむ人は、われを憎むとも、われはなほ人を思ひ後ろむべけれど、いとさしもえあらず。

慈悲深うおはする仏だに、三宝そしる罪は浅しとやは説いたまふなる。まいて、かばかりに濁り深き世の人は、なほつらき人はつらかりぬべし。それを、われまさりて言はむといみじき言の葉を言ひつけ、向かひみてけしき悪しうまもり交はすと、さはあらずもて隠し、うはべはなだらかなるとのけぢめぞ、心のほどは見えはべるかし。

2.4. 日本紀の御局と少女時代回想

左衛門の内侍といふ人はべり。あやしうすすろによからず思ひけるも、え知りはべらぬ心憂きしりうごとの多う聞こえはべりし。

内裏の上の『源氏の物語』、人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、
「この人は、日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才あるべし。」
と、のたまはせけるを、ふと推しはかりに、
「いみじうなむ才がる。」

と殿上人などに言ひ散らして、「日本紀の御局」とぞつれたりける、いとをかしくぞはべる。この古里の女の前にてだにつつみはべるものを、さる所にて才さかし出ではべらむよ。

この式部の丞といふ人の、童にて書読みはべりし時、聞き習ひつつ、かの人は遅う読みとり、忘るるところをも、あやしきまでぞ聴くはべりしかば、書に心入れたる親は、「口惜しう。男子にて持たらぬこそ幸ひなかりけれ」とぞつねに嘆かれはべりし。

それを、「男だに才がりぬる人は、いかにぞや。はなやかならずのみはべるめるよ」と、やうやう人の言ふも聞きとめて後、一といふ文字をだに書きわたしはべらず、いとてづつに、あさましくはべり。

読みし書などいひけむもの、目にもとどめずなりてはべりしに、いよいよかかること聞きはべりしかば、いかに人も伝へ聞きて憎むらむと、恥づかしさに、御屏風の上書きたることをだに読まぬ顔をしはべりしを、宮の御前にて『文集』の所々読ませたまひなどして、さるさまのこと知ろしめさまほしげにおぼいたりしかば、いとしのびて人のさぶらはぬもののひまひまに、をととの夏ごろより、「楽府」といふ書二巻をぞしどけながら教へたてきこえさせてはべる、隠しはべり。

宮ものびさせたまひしかど、殿も内裏もけしきを知らせたまひて、御書どもをめでたう書かせたまひてぞ、殿はたてまつらせたまふ。まことにかう読ませたまひなどすること、はた、かのもの言ひの内侍は、え聞かざるべし。知りたらば、いかに誹りはべらむものと、すべて世の中ことわざしげく憂きものにはべりけり。

2.5. 求道への思いと逡巡

いかに、今は言忌みしはべらじ。人、と言ふとも、かく言ふとも、ただ阿弥陀仏にたゆみなく、経をならひはべらむ。世の厭はしきことは、すべてつゆばかり心もとまらずなりにてはべれば、聖にならむに、懈怠すべうもはべらず。ただひたみちに背きても、雲に乗らぬほどのたゆたふべきやうなむはべるべかなる。それに、やすらひはべるなり。年もはた、よきほどになりもてまかる。いたうこれより老いほれて、はた目暗うて経読まず、心もいとどた

ゆさまさりはべらむものを、心深き人まねのやうにはべれど、今はただ、かかるかたのことをぞ思ひたまふる。それ、罪深き人は、またかならずしもかなひはべらじ。前の世知らるることのみ多うはべれば、よろづにつけてぞ悲しくはべる。

2.6. 宮仕女房批評記の結び

御文にえ書き続けはべらぬことを、良きも悪しきも、世にあること、身の上の憂へにても、残らず聞こえさせおかまほしうはべるぞかし。けしからぬ人を思ひ、聞こえさすとても、かかるべいことやかはべる。されど、つれづれにおはしますらむ、またつれづれの心を御覽ぜよ。また、おぼさむことの、いとかうやくなしごと多からずとも、書かせたまへ。見たまへむ。夢にても散りはべらばいといみじからむ。耳も多くぞはべる。このころ反古もみな破り焼き失ひ、雛などの屋づくりに、この春しはべりにし後、人の文もはべらず、紙にはわざと書かじと思ひはべるぞ、いとやつれたる。こと悪ろきかたにははべらず、ことさらによ。御覽じては疾うたまはらむ。え読みはべらぬ所々、文字落としぞはべらむ。それはなにかは、御覽じも漏らさせたまへかし。かく世の人ごとの上を思ひ思ひ、果てにとぢめはべれば、身を思ひ捨てぬ心の、さも深うはべるべきかな。何せむとにかはべらむ。

第三部 宮仕生活備忘記

1. 第一章 寛弘五年五月二十二日、土御門殿邸の法華三十講

二十二日の暁、御堂へ渡らせたまふ。御車には殿の上、人びとは舟に乗りてさし渡りけり。それには遅れて夜さり参る。教化行ふところ、山、寺の作法うつして大懺悔す。白印塔など多う絵に描いて、興じあそびたまふ。上達部多くはまかでたまひて、すこしぞとまりたまへる。後夜の御導師、教化ども、説相みな心々、二十人ながら宮のかくておはしますよしを、こちかひきしな、言葉絶えて、笑はるることもあまたあり。

事果てて、殿上人舟に乗りて、みな漕ぎ続きてあそぶ。御堂の東のつま、北向きに押し開けたる戸の前、池につくり下ろしたる階の高欄を押さへて、宮の大夫はゐたまへり。殿あからさまに参らせたまへるほど、宰相の君など物語して、御前なれば、うちとけぬ用意、内も外もをかしきほどなり。

月おぼろにさし出でて、若やかなる君達、今様歌うたふも、舟に乗りおほせたるを、若うをかしく聞こゆるに、大蔵卿の、おほなおほなまじりて、さすがに声うち添へむもつましきにや、しのびやかにてゐたる後ろでの、かしう見ゆれば、御簾のうちの人もみそかに笑ふ。

「舟のうちにや老いをばかこつらむ。」

と、言ひたるを聞きつけたまへるにや、大夫、

「徐福文成誑誕多し」

と、うち誦じたまふ声もさまもこよなう今めかしく見ゆ。

「池の浮き草」

とうたひて、笛など吹き合せたる暁方の風のけはひさへぞ心ことなる。はかないことも所から折からなりけり。

2. 第二章 寛弘五年土御門邸に て 道長と和歌贈答

2.1. 源氏物語について

『源氏の物語』、御前にあるを、殿の御覧じて、例のすずろ言ども出で
来たるついでに梅の下に敷かれたる紙に書かせたまへる。

「すきものと名にしたてれば見る人の 折らで過ぐるはあらじとぞ
思ふ」(一五)

たまはせたれば、

「人にまだ折られぬものをたれかこの すきものぞとは口ならしけ
む」(一六) めざましう。」

と聞こゆ。

2.2. 渡殿に寝た夜の事

渡殿に寝たる夜、戸をたたく人ありと聞けど、恐ろしさに、音もせで明か
したるつとめて、

よもすから水鶏よりけになくなくぞ 槇の戸口にたたき侘びつ
る」(一七)

返し、

ただならじとばかりたたく水鶏ゆゑ あけてはいかに悔しからま
し」(一八)

3. 第三章 寛弘七年正月 若宮 たちの御戴餅

3.1. 正月元日 敦成・敦良親王たちの御 戴餅

今年正月三日まで、宮たちの御戴餅に日々に参う上らせたまふ、御供に、みな上臈も参る。左衛門の督抱いたてまつりたまうて、殿、餅は取り次ぎて、主上にたてまつらせたまふ。二間の東の戸に向かひて、主上の戴かせたてまつらせたまふなり。下り上らせたまふ儀式、見物なり。大宮は上らせたまはず。

今年の朔日、御まかなひ宰相の君。例のものの色合などことに、いとをかし。蔵人は、内匠、兵庫仕うまつる。髪上げたる容貌などこそ、御まかなひはいとことに見えたまへ、わりなしや。薬の女官にて、文室の博士さかしだちさひらきゐたり。膏薬配れる例のことどもなり。

3.2. 正月二日初子の日 臨時客

二日、宮の大饗はとまりて、臨時客東面とり払ひて、例のごとしたり。上達部は、傳大納言、右大将、中宮大夫、四条大納言、権中納言、侍従の中納言、左衛門督、有国の宰相、大蔵卿、左兵衛督、源宰相、向かひつつゐたまへり。源中納言、右衛門督、左右の宰相の中将は長押の下に、殿上人の座の上に着きたまへり。

若宮抱き出でたてまつりたまひて、例のことども言はせてまつり、うつくしみきこえたまひて、上に、

「いと宮抱きたてまつらむ。」

と、殿ののたまふを、いとねたきことにしたまひて、

「ああ。」

とさいなむを、うつくしがかりきこえたまひて、申したまへば、右大将など興じきこえたまふ。

正月十五日 敦良
親王御五十日の祝い

上に参りたまひて、主上、殿上に出でさせたまひて、御遊びありけり。殿、例の酔はせたまへり。わづらはしと思ひて、かくろへみたるに、

「なぞ、御父の御前の御遊びに召しつるに、さぶらはで急ぎまかでのける。ひがみたり。」

など、むつからせたまふ。

「許さるばかり歌一つつかうまつれ。親の代はりに。初子の日なり。詠め詠め。」

とせめさせたまふ。うち出でむに、いとかたはならむ。こよなからぬ御酔ひなめれば、いとど御色合ひきよげに、火影はなやかにあらまほしくて、

「年ごろ、宮のすさまじげにて、一所おはしますを、さうざうしく見たてまつりに、かくむつかしきまで、左右に見たてまつるこそうれしけれ。」

と、大殿籠もりたる宮たちを、ひき開けつつ見たてまつりたまふ。

「野辺に小松のなかりせば」

とうち誦じたまふ。新しからむことよりも折節の人の御ありさま、めでたくおぼえさせたまふ。

またの日、夕つ方、いつしかと霞みたる空を、造り続けたる軒のひまなさにて、ただ渡殿の上のほどをほのかに見て、中務の乳母と昨夜の御口ずさびをめできこゆ。この命婦こそものの心得て、かとかどしくははべる人なれ。

3.3. 正月十五日 敦良親王御五十日の祝い

あからさまにまかでて、二の宮の御五十日は正月十五日、その暁に参るに、小少将の君、明け果ててはしたなくなりたるに参りたまへり。例の同じ所にゐたり。二人の局を一つに合はせて、かたみに里なるほども住む。ひとたびに参りては、几帳ばかりを隔てにてあり。殿ぞ笑はせたまふ。

「かたみに知らぬ人も語らはば。」

正月十五日 敦良
親王御五十日の祝い

など聞きにくく、されど誰れもさるうとうとしきことなければ、心やすくてなむ。

日たけて参う上る。かの君は、桜の織物の袷、赤色の唐衣、例の摺裳着たまへり。紅梅に萌黄、柳の唐衣、裳の摺目など今めかしければ、とりもかへつべくぞ、若やかなる。上人ども十七人ぞ、宮の御方に参りたる。いと宮の御まかなひは橘三位。取り次ぐ人、端には小大輔、源式部、内には小少将。

帝、后、御帳の中には二所ながらおはします。朝日の光りあひて、まばゆきまで恥づかしげなる御前なり。主上は御直衣、小口たてまつりて、宮は例の紅の御衣、紅梅、萌黄、柳、山吹の御衣、上には葡萄染めの織物の御衣、柳の上白の御小袷、紋も色もめづらしく今めかしき、たてまつれり。あなたはいと顕証なれば、この奥にやをらすべりとどまりてあたり。

中務の乳母、宮抱きたてまつりて、御帳のはざまより南ざまに率てたてまつる。こまかにそびそびしくなどもあらぬかたちの、ただゆるるかに、ものものしきさまうちして、さるかたに人教へつべく、かどかどしきけはひぞしたる。葡萄染めの織物の袷、無紋の青色に、桜の唐衣着たり。

その日の人の装束、いづれとなく尽くしたるを、袖口のあはひ悪ろう重ねたる人しも、御前の物とり入るとて、そこらの上達部、殿上人に、さしい出でてまぼられつることぞ、のちに宰相の君など、口惜しがりたまふめりし。さるは悪しくもはべらざりき。ただあはひの褪めたるなり。小大輔は紅一襲、上に紅梅の濃き薄き五つを重ねたり。唐衣、桜。源式部は濃きに、また紅梅の綾ぞ着てはべるめりし。織物ならぬを悪ろしとにや。それあながちのこと。顕証なるにしもこそ、とり過ちのほの見えたらむ側目をも選らせたまふべけれ、衣の劣りまさりは言ふべきことならず。

餅まゐらせたまふことども果てて、御台などまかでて、廂の御簾上ぐるきはに、上の女房は御帳の西面の昼の御座に、おし重ねたるやうにて並みあり。三位をはじめて典侍たちもあまた参れり。

宮の人びとは、若人は長押の下、東の廂の南の障子放ちて、御簾かけ

正月十五日 敦良
親王御五十日の祝い

たるに、上臈はみたり。御帳の東のはざま、ただすこしあるに、大納言の君、小少将の君みたまへる所に、たづねゆきて見る。

主上は、平敷の御座に御膳まゐり据ゑたり。御前のもの、したるさま、言ひ尽くさむかたなし。簀子に北向きに西を上にて、上達部。左、右、内の大臣殿、春宮傅、中宮の大夫、四条大納言、それより下は見えはべらざりき。

御遊びあり。殿上人はこの対の辰巳にあたりたる廊にさぶらふ。地下は定まれり。景斉朝臣、惟風朝臣、行義、遠理などやうの人びと。上に、四条大納言拍子とり、頭弁、琵琶、琴は、□□、左の宰相中将、笙の笛とぞ。双調の声にて、「あな尊と」、次に「席田」「此の殿」などうたふ。曲のものは、鳥の破、急を遊ぶ。外の座にも調子などを吹く。歌に拍子うち違へてとがめられたりしは、伊勢守にぞありし。右の大臣、

「和琴、いとおもしろし。」

など、聞きはやしたまふ。ざれたまふめりし果てに、いみじき過ちのいとほしきこそ、見る人の身さへ冷えはべりしか。

御贈物、笛齒二つ、筥に入れてとぞ見はべりし。

寛弘五年 左大臣道長 右大臣顕光 内大臣公季<左大将>
大納言道綱<傅> 権大納言実資<右大将 按察> 大納言懐忠
<民部卿> 権中納言齐信<中宮大夫 右衛門督 十月十六日
正二位> 中納言公任<皇太后宮大夫 左衛門督> 権中納言隆
家 権中納言俊賢<治部卿 中宮権大夫 十月従二位> 中納言
時光<弾正尹> 権中納言忠輔<兵部卿> 参議有国<勘解由長宮
播磨権守> 行成<左大弁 侍従 皇太后宮権大夫> 懐平
<春宮大夫 左兵衛督 伊予権守> 輔正<式部大輔 八十五>
兼隆<右近中将如元> 正光<大蔵卿> 経房<左近中将
近江権守> 実成<右中将 侍従> 前帥伊周<准大臣 給封戸
> 正三位頼通<春宮権大夫> 従三位兼定<右兵衛督> 蔵人頭
左中弁通方 左中将頼定 左中将経房 頼親 少将 重尹
兼綱 忠経 頼宗 公信 教通 源雅通
济政 道政

寛弘七年十一月廿八日遷新造一条院中宮同行啓

寛弘七年 左大臣道長一 右大臣顕光 内大臣公季<左大将>
> 前内大臣伊周<正月二十八日薨三十七> 大納言道綱<傅>
実資<右大将按察> 権大納言齐信<中宮大夫> 公任<皇太后

正月十五日 敦良
親王御五十日の祝い

宮大夫> 権中納言俊賢<治部卿中宮権大夫十二月十七日正二位>
中納言隆家 権中 行成<皇太后宮権大夫侍従> 頼通<左
衛門督春宮権大夫> 中納言 時光<年> 権中 忠輔<兵部卿
> 参議 有国<勘解由長官三月十六日修理大夫> 懐平<右衛門
督春宮大夫> 兼高<右中將> 正光<大蔵卿> 経房<左
中將> 実成<右兵衛督> 頼定 左中將 経房<参議>
公信<蔵人従四上内蔵頭> 教通<従四位上十一月二十八
日従三位行幸如元十五> 少將 濟政<十一月二十五日右中將>
兼綱<従四位下> 忠経<蔵人正五位下正月七日従四下>
定頼<二月十六日元右十二月二十日正五下> 朝任<蔵人従
五位下十一月二十五日才任元右> 右中將兼澄 公任<任左> 頼
宗<十一月二十八日正四下> 濟政<十一月二十五日任> 少
將 雅通<二月三十日兼木工頭> 道雅<従四下> 好親<
正月七日従五上> 定頼<任左> 朝任<二月十六日任元少
納言任左> 経親<二月二十五日任元左衛門佐>

